

保育力を育むための高大連携授業の可能性 —紙芝居制作をとおして—

中島法晃

岐阜女子大学文化創造学部

(2020年9月30日受理)

Possibility of collaborative learning between universities and high schools to nurture childcare — Through the Kamishibai production —

Faculty of Cultural Development,

Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

NAKASHIMA Houkou

(Received September 30, 2020)

要 旨

保育士不足が叫ばれ久しい現在において、各自治体では保育士不足解消の取り組みがあったり、保育士試験受験資格が緩和されたり等、保育士確保に向けた取り組みがなされている。保育士養成校における学生指導については、より専門性をもった質の高い保育を目指す保育士養成が急務となっている。本稿では、大学の演習で行う紙芝居制作の授業を、保育系コースを有する高等学校において行うことで、保育士を志望する高校生にとってどのような示唆が得られるかについて考察した。授業後のアンケートでは、高校で保育の授業はあっても色の塗り方や配色、画面の構図等の美術の専門的な指導を受けることができたことについての感想が多く、完成作品に反映されていた。高大連携授業を受けた生徒の進路や最終的に保育者となった際に、学びがどのように活かされていくかという長期的な視点をもち継続して調査していきたい。

キーワード：紙芝居制作 高大連携 表現指導法 保育士養成 保育実践演習

1. はじめに

紙芝居は戦後に登場した街頭紙芝居より始まり我が国で発展してきた歴史を持ち、現在まで児童文化財として保育・幼児教育現場で広く活用されている。保育士および幼稚園教諭養成課程を有する岐阜女子大学初等教育学専攻では、2015年より保育者を志す高校生

を対象とした「紙しばいコンテスト」を開催している。「紙しばいコンテスト」は、第1回から第3回までは物語から絵、脚本までを創作する「紙しばい創作部門」を募集していたが、2018年の第4回からは、創作部門の他に、絵を描くことに苦手意識をもつ高校生を対象にした「紙しばい物語部門」も設けた。保育士になることを志望する者にとって、

紙芝居を制作することは保育者養成課程における保育内容「言葉」と「表現」,「人間関係」,さらには扱う題材によっては「環境」や「健康」までの5領域を包含する教材であると考えられることから、岐阜女子大学では保育所実習や幼稚園実習が終わる頃の3年次に開講される「保育実践演習」において創作紙芝居を制作する。拙稿¹⁾において、「紙芝居制作は、学生のこれまでの学修や実習経験によって萌芽した保育観を醸成させるための手段として有効である」ことを明らかにし、制作した後に学生は実習やボランティア先等で自分が制作した紙芝居を披露している。自分の保育観を反映させた紙芝居は、市販されている紙芝居よりもダイレクトに自分の思いを子どもに伝えることができるであろう。「紙しばいコンテスト」は、保育士を目指して保育士養成校への進学を志望する高校生にとってのチャレンジしがいのあるコンテストだといえる。また、第1回目の「紙しばいコンテスト」の応募作品は18点であったが、第6回目は124点の応募であった。保育系の高校の教諭にとって生徒の力を伸ばすためのきっかけとしてコンテストを活用しており、高校単位での応募は年々増えてきている。

本稿では、「紙しばいコンテスト」をきっかけにして岐阜女子大学と愛知県立佐屋高等学校²⁾が高大連携調停を結んだことによって始まった出張授業「紙しばいを作ろう」について、保育士養成課程における高大連携の可能性について考察する。

2 保育士養成に関わる課題

近年、保育施設の不足や、働き手である保育士不足が社会問題になっており、厚生労働省の報告によると、2017年度末の時点で保育士数は全国で約7.4万人不足³⁾していたとい

う。保育士不足の原因や理由として、賃金が希望と合わないことや、休暇の少なさ等が挙げられている。東京都福祉保健局による2018年3月の東京都保育士実態調査報告書⁴⁾では、現在の職場への改善希望事項として、給与・賞与等の改善や職員数の増員、事務・雑務の軽減等が挙げられ、また、保育士を辞めた理由として、職場の人間関係についてや、仕事量の多さ、給料の安さ等が挙げられており、保育士としての経験が7年以下の離職率は10.3%となっていることを明らかにしている。

現在、国や各自治体では就業支援制度や再就職支援等、保育士不足解消のための様々な取り組みが行われている。また、2015年に施工した国家戦略特別区法における地域限定保育士制度が制定されたり、2016年からは保育士試験受験資格要件の緩和等⁵⁾により保育士試験が年1回から2回に変更となり資格取得がしやすくなったりしている。今後保育施設が増加し、保育士不足解消のためにこれまでより資格が取得しやすくなることで就業する保育士が増加したとしても、保育の質が低下することは避けなければならない。

2017年12月4日に行われた保育士養成課程等検討会⁶⁾において、上述のような社会問題や、子ども・子育て支援新制度の施行等の保育を取り巻く社会情勢の変化を鑑み、保育所保育指針の改定を踏まえ、より「実践力のある保育士の養成」に向けて、保育士養成課程等の見直しについて検討された。保育士不足が深刻化し資格取得が緩和されている一方で、保育の質を確保していく取り組みも推進されている。保育所保育指針総則第1章1(1)イ⁷⁾には、より専門性をもった保育士の育成が求められ、保育の中で常に自己を省察していくことの重要性が示されている。

保育の専門性について、保育所等における

保育の質の確保・向上に関する検討会⁸⁾において主に「内容」・「環境」・「人材」の3つの観点が考えられ、それぞれ基準やガイドライン等が示された。現場において保育の質を向上し続けていくための人材育成について考える時に、保育士養成課程においてその素地を形成していく必要がある。ひいては、高等学校の保育系のコースで学ぶ高校生に対しても同様であると考えられる。保育士になりたいという夢をもち高等学校に進学し、後に保育士養成課程を有する大学等に進学する。夢を叶えて保育士となっても、早期に退職する可能性が高い職業であることを念頭に置き、保育士養成課程に従事する教員は指導に当たらなければならない。

3 高等学校保育コースと保育士養成課程を有する大学の高大連携

保育系のコースを有する高等学校では、高等学校学習指導要領や保育所保育指針に基づいて保育に関する専門的な指導が行われている。また、公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会が主催する民間の検定試験である全国高等学校家庭科保育技術検定⁹⁾を目指し取り組んでおり、音楽や造形、紙芝居の読み聞かせ等の表現技術や家庭看護技術に関する検定等に向けて、将来保育職に就くための専門的な技術や知識の習得を目指すカリキュラムで構成されている高等学校もある。高等学校で専門的に保育について学び、大学等の高等教育機関に進学して資格を取得するという、保育士を目指す者の高大接続について考える際に、高等学校までに育まれた生徒の力を大学等では更に発展・向上させていかなければならない。

文部科学省が推奨している高大連携の在り方¹⁰⁾として、高等学校から大学へ進学するう

えで、生徒個々の能力を高めることをねらいとしている。職業系の科やコースを有する高等学校にとって、より専門的な大学の授業を高校で受講することができるメリットがある。文科省は、変化の激しい時代において、新たな価値を創造していく力を育成するために「高等学校・大学の双方が、後期中等教育機関・高等教育機関としてそれぞれ独自の目的や役割を有していることを踏まえつつ、高等学校と大学との接続を柔軟に捉え、生徒一人一人の能力を伸ばすための、高等学校・大学双方が連携した教育の在り方」について提言し、様々な取り組みを進めている。

全国的に見ても、保育士養成課程を有する大学において、キャリアサポートに関してや、保育に関する科目の出前授業や出張講義が高等学校で行われている報告があり、様々な形で高大連携が行われているが、まだその実践は少ない。大学と高等学校における教科間の連携を通じた授業実践を行うことで、大学生と高校生の保育に対する意識の差異が浮かび上がるであろう。

岐阜女子大学では、初等教育学専攻が主催する第5回「紙しばいコンテスト」への作品応募をきっかけとして、佐屋高等学校と高大連携の取り組みを進めることになった。佐屋高等学校は農業科と家庭科で編成されている。2018年から家庭科に関する学科の中に「ライフコーディネーター科」を設け、「生活に関わる衣食住などの専門科目を学ぶとともに、男女共同参画社会の実現に貢献できる専門性の高い保育士・幼稚園教諭等の人材を育成」することを教育目標に掲げ、保育士養成課程のある大学や短期大学への進学を視野に入れたコースである。佐屋高等学校は、様々な大学で公募している各種コンテストへの応募実績を積み重ね、受賞回数も多く、その度に新聞等のメディアに掲載されている。

4 授業の概要

岐阜女子大学と佐屋高等学校の高大連携授業にあたって、高校側には、紙芝居講座をとおして保育に関する知識・技能の向上および紙芝居についての専門性を生徒に習得させること。さらに、完成作品を「紙しばいコンテスト」に応募することによって生徒のやる気を引き出させたいという要望がある。大学側としては、大学で行われている授業の中の紙芝居制作を題材として、制作におけるプロセスの中で、生徒にどのような保育士になりたいかを考えさせることをねらいとして授業を設定した。そして、保育士養成系高等教育機関への進学にあたって、紙芝居について身につけた専門性を自分の武器にして進学させたいという目的がある。

高大連携授業は2020年度4月から全5回に分けて行う計画であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、6月から7月にかけて全4回の日程で行うことになった。

【授業計画】

第1回目(6/16)紙芝居の物語やナレーションを考えるうえで欠くことができない「言葉」についての講義。第2回目(6/30)紙芝居の画面構成について、構図や配色計画についての講義。第3回目(7/21)宿題にした紙芝居のラフ画を検討し、画用紙に下書きおよび着色をする実技指導。第4回目(7/28)紙芝居の本制作指導および画面裏面にナレーションおよびセリフの書き込みに関する指導。

上記の4回を設定し、時間内で終わることができなかった部分に関しては宿題もしくは、高校の通常の授業内で補完してもらうことで進めた。授業計画について基盤としたのは、大学における紙芝居制作を題材としている科目であり、3年次前期に開講する「保育

実践演習Ⅰ」である。1,2年次では保育の基礎的な学修および保育所体験、実習を経験するため、現実的に保育士としての将来像を考え始める頃であるといえる。そういった段階の中で、3年次の保育実践演習Ⅰにおいて、「自分の保育観を醸成すること」および、「自己の保育についての考えを内省し、紙芝居制作を通して自分の思いを他者に伝えること」を目標として紙芝居制作を行っている。

高大連携授業の初年度であることから、高校生の実態をつかむために大学で行なっている演習と同様の進め方で授業を行いながら生徒の様子や雰囲気に合わせて流動的に展開していくイメージで臨んだ。第1回目は「幼児と言葉」に関する講義を国語科教員が担当した。乳児期から幼児期にかけての脳の発達や、言葉を習得するメカニズムについての講義である。紙芝居制作は、物語を考え、絵を描き、ナレーションやセリフを考えるまでの工程を一人で行う。制作する紙芝居を演じる対象者の年齢を設定し、その年齢に合わせた言葉選びが重要となる。高校生同士では理解できる言葉でも、幼児には難しい言葉や言い回しはいくつもある。例えば、「私の感情」という文は幼児には理解しにくい。その場合、「私の気持ち」や、「僕は思う」等の言葉に置き換える必要がある。そういった中で、紙芝居を制作するための学びとして第1回目の講義に据えた。

5 生徒作品

第2回目からは紙芝居の画面を考えるうえで重要となる構図や配色計画について講義を行い、第3,4回では絵コンテを描き、本番用の用紙に下書きをしてから清書するという流れで展開した。事前にワークシートを宿題として課し、それぞれが紙芝居のテーマを考

えた。ワークシートの設問は、「どんな保育者になりたいか」、「子どもに伝えたいこと」等、将来保育現場で働くことを念頭に置いて高校で日々学ぶ生徒にとって、考えやすい問いを設定した。

テーマ	内容
想像力	外から聞こえる音を音楽に見立てる。動物のシルエットから動物の種類を考える。様々な色から関連するものを想像する。(図1) 動物の足跡を見せて何の動物かを問いかける。動物の成長過程を見せて何の動物かを考える。(図2) 空の色や様子が変わっていくことに興味を持つ。動物の耳だけを見せて何の動物かを問いかける。(図3)
しつけ	歯磨きの大切さ(2名)。手洗いうがいの大切さ。勝手に一人で行ってはいけない。
人間関係	友達に優しくすること。相手の気持ちを想像して優しくする。
チャレンジ	自分の力で頑張ること。努力することの大切さ。
家族愛	お母さんの誕生日にお花を摘みにいく。
食育	野菜を食べることは大きくなるために大切。

(表1 生徒テーマ)

生徒17名が紙芝居のテーマに設定した内容から、幼児の想像力を喚起させるものが多いことがわかる。拙稿(2018)では、大学3年生23名が制作した際のテーマとして、保育・幼稚園実習の経験から体験に基づいて子どもに伝えたいことをテーマにする学生が多かった。生徒は、想像力を高めたいというねらいから、動物のシルエット等から何の動物かを当てさせる、クイズ形式で進行していく「参加型紙芝居」作品が多く、紙芝居を通して子どもと楽しく過ごしたいという思いがあることがわかる。参加型ではなく物語型の場合は、手洗いうがいや歯磨き等のしつけに

関するものや、身近なテーマに基づいた作品であった。

テーマが決定してからは、物語の流れや構図、配色等、生徒の進度に合わせて指導を展開した。生徒は保育系コースの生徒であることから、日常的に絵を描いたり物作りをしたり等の活動が多く、絵を描くことに対して抵抗をもつ生徒はいなかった。配色で悩んでいる生徒には色相環を見せて指導したが、基本的には各々の表現したい雰囲気に合わせて自由に制作することができた。

第4回目の授業までに制作を宿題として、最終回で脚本についての授業を行なった。隣の生徒同士で自分が考えた脚本を読み合わせ、幼児向きではないと考えられる言葉について相互で修正しあった。その中で、幼児と関わる経験がさほどない生徒の推敲の根拠はあくまで推測であり、筆者や同席した担任教諭に意見を求める姿が多かった。その後、紙芝居の画面裏面に脚本を書き込んだ。紙芝居の醍醐味である演出については、画面を分割したり抜き方に変化をつける等、それぞれが工夫した紙芝居を制作することができた。以下は紙芝居制作を終えた生徒からのアンケート記述である。

紙しばい制作を通して学んだことについて(抜粋)
<ul style="list-style-type: none"> ・何を子どもたちに伝えるのかをしっかりと考えること。 ・色の構成や遠くから見てもわかりやすく塗ること。 ・色の使い方で印象が変わることや、同じ絵でも色の使い方で変わっていくこと。 ・動物を描く時に目の大きさや角度で印象が変わるので下書きの時点で細かい部分は決めておくこと良い。 ・子どもの気持ちになりながら考えないといけないと学びました。

・どうしたら子どもに伝わるのかを考えて制作するのは大変だった。

・子どもたちに見やすいように絵を描くことはとても大変なんだと改めて学んだ。

・ハッキリとした色使いで塗らないと絵がわかりにくいこと。

・色はたくさんあり、場面によって色を変えたりすることを学びました。紙しばいには参加型と物語型の2つがあり、それぞれによって物語の作り方が違うことを知ることができました。

・色使いや言葉の使い方。

・ストーリー、絵の両方をやり大変だけど、子どもを第一に考えることと楽しく思ってもらえるために工夫する難しさを学んだ。

・子どもの目線になってわかりやすく工夫することを学びました。

・抜き方や色の塗り方、セリフのアドバイスなど細かく丁寧に言ってくれたのですごくわかりやすくて、自分では思いつかないこととかたくさんあったので、完成まですごく楽しみになりました。

・色についてや、言葉の使い方や色々と印象が変わることや、参加型の素晴らしさ、楽しさを学ぶことができました。

(表2 生徒アンケート)

生徒は日頃の保育の授業で絵本や紙芝居の読み聞かせの練習をしているため、様々な種類の紙芝居に触れており、どのような紙芝居が幼児向けのものとしてふさわしいかを理解している生徒が多いといえる。そう行った中で、初めてオリジナルで物語から絵、脚本まで制作したことでいくつかの学びがあったことがわかる。紙芝居の授業内容について、短い期間でエッセンスを伝えることに苦勞した。アンケートの下線部に示した配色や色の塗り方については、「苦勞したところ、難しかったこと」との設問で17名中16名が「難しかった」と記述した。色の塗り方や配色については、美術の専門的な技術であり、大学における講義内で時間をかけて指導する単元

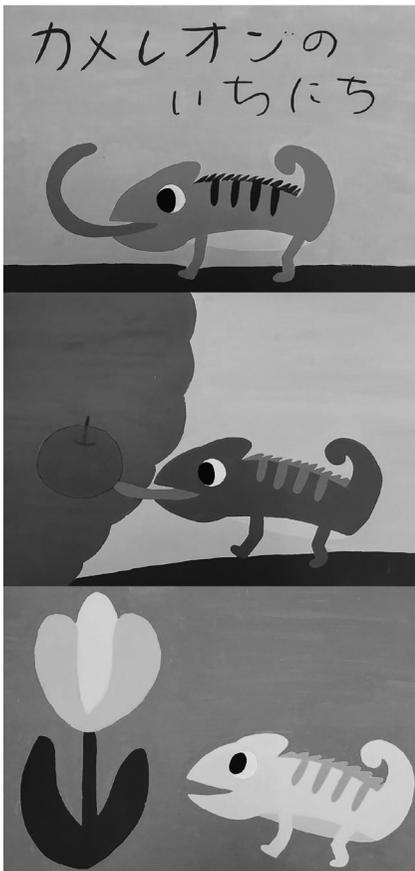
であり、今回の授業では時間の都合でじっくりと指導することができなかったことは反省点である。紙芝居制作は絵を描くことだけではなく物語や脚本、演出までの全てを自分で考えて創りあげるものであり、幼児の発達段階や言葉についての理解も必要になることから、保育者養成の観点から見ても専門的な教材であることは明らかである。

6 まとめ

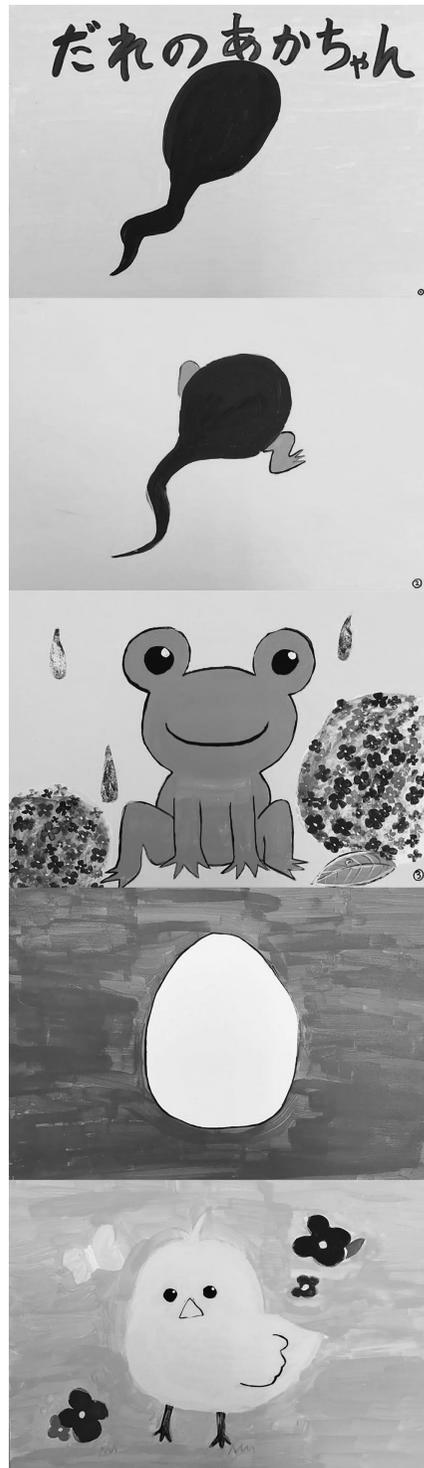
筆者は大学において3年次学生が受講する「保育実践演習Ⅰ」で、保育・幼稚園実習等の経験を踏まえた紙芝居制作の演習を行っており、今回の高大連携授業では、保育コースを有する高等学校において同様に紙芝居制作の授業を行なった。本稿では大学生の紙芝居作品との比較は行わないが、保育実習経験がある大学生と高校生との紙芝居のテーマ設定には違いがある。紙芝居は、作者の現在の保育観が表象されるといえる。「どんな保育者になりたいか(どういう保育を行いたいか)」、「子どもに何を伝えたいか」という問いは、保育者となってからも日々考えることであり、現場の保育者にとっても自己内省をするために紙芝居制作は有効ではないだろうかと考えられる。

文科省の高大連携の在り方に示されているように、高等学校と大学との接続を柔軟に捉え、生徒一人一人の能力を伸ばすために高等学校・大学双方が連携した教育を持続的に進めていかなければならない。高等学校を卒業後、保育者養成課程を有する高等教育機関に進学し改めて保育者になるための歩みを進めることになる高校生にとって、保育内容の各領域を横断して学修することができる紙芝居制作はどのような意義があっただろうか。高大連携授業の目的は、単に大学の講義の出前

授業を行うだけでない。受講した高校生がどのような進路に進み、高校時代の学びと保育士養成校における学修がどのように関連しているかを追跡していくべきである。本学における高大連携授業は始まったばかりである。次年度以降も継続的に行うことで、生徒の進路について追跡していくことも可能であろう。最終的に保育者になった際に、これまでの学びが現場でどのように生かされていくかという長期的な視点をもち今後も継続して調査していきたい。



(図 1 生徒作品)



(図 2 生徒作品)



(図 3 生徒作品)

注

- 1) 中島法見, 鈴木里香 (2018) 「保育者養成課程における紙芝居制作の意義」岐阜女子大学カリキュラム開発研究第3巻1号 pp. 81-90
- 2) 愛知県立佐屋高等学校 <https://saya-h.aichi-c.ed.jp>
- 3) 厚生労働省 (2014) 「保育人材確保のための『魅力ある職場づくり』に向けて」
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11601000-Shokugyouteikyoku-Soumuka/0000057898.pdf>
- 4) 東京都福祉保健局「平成30年度東京都保育士実態調査結果(報告書)」https://www.fukushihihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shikaku/30_hoikushichousa.files/430_chosakekkashosai.pdf
- 5) 厚生労働省 (2017) 「保育士養成課程等の見直しについて(検討の整理)[報告書]」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000189068.html>
- 6) 一般社団法人全国保育士養成協議会 <https://www.hoyokyo.or.jp/profile/>
- 7) 厚生労働省編 (2018) 「保育所保育指針解説」フレーベル館
- 8) 厚生労働省 (2018) 「保育所等における保育の質の確保・向上に係る関連資料」<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000360397.pdf>
- 9) 公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会 <http://www.katei-ed.or.jp>
- 10) 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 (2007) 「報告書——一人一人の個性を伸ばす教育を目指して——」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/07032207.htm